

## 戦争によるモラルインジャリーを癒すために

2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件から20年目を迎えました。

アメリカは、この事件を契機としてアフガニスタンに報復を開始します。03年3月20日、テロ事件の首謀組織であるアルカイダとイラク政府がつながっているととらえ、イラクの首都バグダードへの空爆を皮切りに戦闘がスタートします。

それから20年。アメリカ軍はアフガニスタンから撤退しました。

### 『暗黙の協定』

『帰還兵の戦争が終わるとき 歩き続けたアメリカ大陸2700マイル』（草思社）が刊行されました。「イラクの自由作戦」の支援部隊としてイラクの都市モスルに派遣され1年間に過ぎたトム・ヴォス偵察歩兵はイラクで負ったトラウマを癒すためのアメリカを歩いて横断します。その記録です。

軍人になる、軍隊に入るとはとはどういうことでしょうか。

「軍人になるとは、自分の行動はもちろん、みんなの行動に責任を持つことだ。他者も罰の重荷を、自分のものとして負うことだ。苦しみを分かち合い、その苦しみという絆によって他者とつながることだ。

軍隊に入るとは・・・自我を完全に放棄すること。自分の欲求と要求を手放し、全体の意思に屈すること。・・・そして巨大な集団に属する単細胞生物として生まれ変わり、何も考えずに他者を支援し、何の疑問も持たずに行動し、命をかけて自分より大きな集団を守るのだ。」

そのような『暗黙の協定』が戦闘経験者と一般市民の間にあると無意識に思い込ませられ確信していました。

『暗黙の協定』は3部構成になっています。

「第1に、復員軍人は自己完結型で、自己充足型で無私無欲でなくてはならない。他者のために生き、自分よりも他者のニーズを優先しなくてはならない。現役中は戦友を最優先し、自分より集団のニーズを優先するし、退役したら・・・助けを講う側ではなく引き続き助ける側でなくてはならない。

第2に、帰還後不調を感じたら自分で対応すること。一般市民を巻き込んだり、市民の支援や知識に頼ったりしてはならない。戦争の恐怖に黙って耐えられるだけの勇気がないときや・・・その事実を多言してはならない。じっと押し黙って、無私の英雄のイメージを損なわないようにしなくてはならない。

第3に、戦争の痕跡は隠蔽しなくてはならない。それも未来永劫に。地の底に葬り去ら

なければならない。

私たち軍人が戦争に行くのは、人民に認められた様々な自由とアメリカの生活様式を守るためだけではない。肉体的な意味でも、精神的な意味でも、一般的市民が戦争にいかなくてすむようにするためだ。私たちが戦争に行く限り、市民は敵陣に入り込み戦争を直に体験する必要もない。

市民をすべての脅威から守るためには、自分の見たことやってきたことはもちろん、それに対していただいた感情も偽る必要があるのだ。これ以上重大な嘘はない、市民を守ると誓うなら、市民を爆弾と爆弾の恐怖から守るがけでは不十分だ。」

『神、国、奉仕』と表現される、軍隊の神聖なる3原則においては『家族』は任意で追加できる第4の要素に過ぎないのだ。」

### 「あなたは、人を殺しましたか？」

「家族」から離れ、3原則で「契約」した兵士の姿が、アレン・ネルソン著『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？ ベトナム帰還兵が語る「本当の戦争」』（2003年講談社刊）に書かれています。

アレン・ネルソン。ニューヨーク市生まれのアフリカ系アメリカ人です。ベトナム戦争に海兵隊員として参加し、1967年、20歳の時、実家に帰ります。

「ただいま」

母が奥から出てきました。母はじっと見つめました。せいっぱいのほほえみを母に向かってうかべました。そして母をだきしめようと近づいたそのときでした。母は拒絶するように首を大きくふると、こう言ったのです。

「お前はもう、わたしの子どもじゃない」

そのまま母は背を向け、キッチンへもどっていきました。

でも母の気持ちが変わりました。母は、笑みをうかべた仮面の向こう側に、軍隊によって洗脳された殺人者の体臭と、ぬぐっても消えにおびたらしい血のにおいとを、すぐにかぎとったのです。もう、あの無邪気なアレンではなかったのです。

ネルソンはその後ホームレスになります。23歳です。

通りを歩いていると、高校の同級生から声をかけられます。そして教師である彼女から生徒たちにベトナムでの体験を話すことを依頼されます。まよいましたが了解します。

小学校4年生を前に話をしました。

「1965年にわたしは海兵隊に入りました。そして、ベトナムに行きました」

それから、戦争というものが、たくさんの人がケガをする、どんなにおそろしく、悲しいものであり、しかも莫大なお金がかかるものかということ話をしました。ただし、残酷な話にはほとんどふれませんでしたし、もちろんベトナムで自分がしたことについてはいっさい語りませんでした。統計学者か評論家のような、おおざっぱな数や、ピントのぼや

けたイメージを使って、きれいごとばかりを語りつづけました。

話し終わると、拍手がありました。

教師が質問はないかとたずねます。いろんな質問がありました。

いちばん前の列の女の子が手をあげました。

「ミスター・ネルソン」

まばたきもせずネルソンを見つめるとたずねました。

「あなたは、人を殺しましたか？」

だれかにおなかをなぐられたような感じがしました。

でも、何も言うことができませんでした。目をつむりました

心の中に深い暗闇が穴をあけていました。その暗闇の中から、初めて殺したベトナム人の死体がうかびあがってきました。

人を殺したことに誇りさえ感じていたのです。

教室の床にのめりこみそうな自分の体を、いっしょうけんめいにささえていました。

心の中では、さまざまな声が入りみだれていました。

ひとつの声は、このまま、教室を立ち去れと言っていました。もうひとつの声は、こう言っていました。「おまえにほんとうの戦争のことをだれも教えてくれなかったからこそ、今のこわれかけたおまえがいるのだ。だから、子どもたちには真実を知る権利がある」と。しかし、もしYESと言ったら、子どもたちにとってもはや「ミスター・ネルソン」ではなく、残虐な殺人者であり、子どもたちはこわがるにちがいありません。

気がつけばつぶやくようにして、しかし、はっきりとした口調で「YES」と答えていました。もう後もどりはできませんでした。自分が人殺しであることを、無垢な子どもたちの前でみとめたのです。

そのとき、だれかの手が体にふれるのを感じました。

思わず目を開くと、腰に小さな手を回してだきしめようとしている、質問をしたあの女の子の姿がそこにありました。女の子の瞳には涙がいっぱいたまっていました。

「かわいそうなミスター・ネルソン」

女の子がそういいました。彼女は、わたしのために泣いてくれたのです。

と、同時に、わたしの目から大粒の涙が幾粒も幾粒も頬を伝っていきました。

このとき、何かが溶けたのでした。自分自身のことがとてもよく見えるような気がしました。何をすべきかもわかったような気がしました。

戦ったベトナム戦争を、悪夢として時間の牢屋の中に閉じ込めるのではなく、今もなお目の前でおきていることとして見つめなくてはならないのです。

悪夢に勝つためには、真実を語る必要があるのです。自分自身に対しても、そして他者に対しても。

## 「コミュニティは一丸となって戦士の貢献を称えた」

『帰還兵の戦争が終わるとき』です。

「きっとある。絶対にある。これ以上こんな気分にならずに済む世界が、存在するはずだ」  
トム・ヴォスは歩いてアメリカを横断しようと決意します。他に選択肢がなかったからです。トラウマを克服するための一歩を踏み出さなければ、イラクで負ったトラウマに喰われ、自殺するという自覚がありました。

軍隊で一緒だった1人に電話します。

「俺たちイラクから戻ってきてからずっと、ちゃんと問題に向き合う時間がなかつたろう？ いいかげん、時間を取ろうかなと思ってさ。カリフォルニアに友達がいるんだ。陸軍で一緒だった。そこまで歩いて会いに行くことにしたんだ」

一緒にそして帰還兵士が抱えている問題を訴えながら歩きます。

途中、父が空軍にいたことがあり元軍人の友だちがいるというネイティブアメリカンに出会います。

「ネイティブアメリカンの一部の部族では、戦場から帰る戦死を英雄として迎える伝統がある、と彼はいった。戦士の帰還は一大事だったんだ。戦の勝敗にかかわらず、コミュニティは一丸となって戦士の貢献を称えた。そして戦いの勝敗にかかわらず、戦士たちは戦う理由を理解していた。癒しや内省の期間が必要な場合は、傷と向き合うための時間と場所を与えてもらった。そうやって、必ず心と体両方の回復のために時間をおいてから、社会に戻り、社会の一員として貢献することになっているんだ。

でも現代の戦士は目的を知らないまま戦うのがふつうだ。そのうえ、戦いから戻っても、こういう段階を踏めば社会復帰できるという系統立ったプロセスがどこにも存在しない・・・戦い終えた戦争の意味を、そして帰国してもなお心の中で荒れ狂う戦争の意味を、1人で見つけなければいけないんだ。」

ネイティブアメリカンが続けます。

「君たちには君たちの物語があるはずだ。できるなら、今日まで君たちを苦しめてきた、忘れがたい記憶を、心の奥に閉じ込めてきた記憶を、思い出してみてもどうだろう。今ここで、その話を聞かせてもらえないだろうか？」

「もし自分の身に起きたことをつかまえて、下のほうへ押し込もうとすれば苦しい経験から学べるはずの教訓は、決して学べない。逃げるのをやめたとき、苦しみは力に変わる・・・それまでは、苦しみは居座り続ける・・・だから癒されたいなら、苦しみと向き合うしかない。苦しみを通り抜けるしかない。苦しみをとことん受け入れるしかない。そのとき初めて、最も君を傷つける記憶が、君を開放する記憶に変わるんだ。

でも君の代わりに苦しみを変化させられる人はいない・・・私の部族の伝統では、外部の

人間には傷を癒せない。君の癒しの責任は、君が負うんだ。自発的に癒さないといけない。『その力をひつつかんで、こういうんだ。この苦しみから教訓を学んでやる。こいつらから力を得てやる。』

トム・ヴォスはその瞬間、すべてが府におちます。

## 魂の傷の正体は道徳的負傷（モラルインジャリー）

同行を続けた記者から記事が送られてきます。

「戦士たちは誇りと不安感を合わせ持ち・・・もがいている・・・善悪の理解を根本から覆され・・・戦争にともなう不明確な道徳と倫理によって・・・死んでも地獄、生きても地獄・・・道徳的負傷（モラルインジャリー *moral injury*）は比較的新しい概念で・・・」

記者の定義によると、モラルインジャリーは「多くの人の心情を言い表しているように思える比較的新しい概念、つまり、善悪の理解を根本から覆されたと感じと嘆き、その結果生じやすい無気力感もしくは罪悪感」。

これこそ、魂の傷の正体であり、単なるPTSDでない何かの正体であり、不眠の原因でした。

モラルインジャリーとは、魂に刻まれた傷で、善悪に関するゆるぎない信念を持っているながら、それに背く行為を実行または目撃した時に生じます。極度のトラウマであり、嘆き、悲しみ、屈辱感、罪悪感などのかたちで、あるいはその複合系として現われます。そしてネガティブな思考、自己嫌悪、他者に対する憎悪、後悔の念、脅迫行為、破壊的傾向、自殺的傾向、病的なまでの孤立感といった症状を呈します。

「私は戦争を容認しているのか？ 戦闘中の自分の行為を正当化しようとしているのか？

そうではない。

戦争は、できるだけ避けるべき選択肢だ。神は戦時にも存在すると確信しているが、戦争が起こる理由はわからない。戦争に限らず、私たちの人生で起きる悪いことが、なぜ起こるのかまったく分からない。ただ、悪いことが起きるときは、自然の外側で起きるわけでも、神から離れたところで起きるわけでもないことは分かる。だとしたら、その体験を生かせば、成長や癒しや平和を促進できるはずなのだ。」

トム・ヴォスは“瞑想”という方法でモラルインジャリーからの癒しに辿り着きます。

アメリカは、たくさんの自国の兵士を負傷させ、自殺に追い込みました。9.11以降の戦闘行為で死亡した兵士は7.057人、自殺した兵士と退役軍人は3万人を超えると推計されています。2050年までにかかる退役軍人の医療費は2.2兆ドル（約240兆円）と推定されています。

いじめ メンタルヘルス労働者支援センター